夕刊讀賣新聞　（第3種郵便物認可）
2015(H27)年6月17日(水)
ええやん！

ザ・タイガース研究論

1960年代後半から70年代初め、社会現象となったGS（グループサウンズ）ブームを牽引したのが「ザ・タイガース」だ。現在も多くの人々に愛されるバンドを、時代を映す鏡として捉えた国際日本文化研究センター（京都市）の共同研究会が「ザ・タイガース研究論」（近代映画社）を出した。魅力の秘密は何なのか。（渡辺達治）

復活公演で熱演する「ザ・タイガース」のメンバー。左から岸部、沢田、瞳、加橋、森本（2013年12月3日、日本武道館で）

日本の成長と挫折 体現

「奇麗な大人」成熟の理想像

京都出身のザ・タイガースは67年デビュー。大ヒットを連発し、芸能雑誌の人気投票で1位になるなどした。近年、メンバーが再結集して東京ドームなどで行った公演も、年配ファンで大盛況だった。

人気の理由を探ろうと、2012度から磯前順一教授（宗教研究）を中心に研究がスタート。中古レコード店主や音楽プロデューサーら15人ほどが参加し、約2年かけて、レコードや雑誌記事、テレビ出演の記録などを集めた。研究成果であるデータと論文を1冊の本にまとめたのが「ザ・タイガース研究論」だ。

ザ・タイガースがたどった軌跡を、磯前教授は「日本の成長や挫折と重なる点に意味がある」と説明する。彼らが登場したのは高度成長期。多くの人々が、一生懸命やれば報われる、社会も豊かになると考え、「成長を信じた頃だった」。欧米の大衆文化や豊かさへの憧れも強かった。そんな中、髪を伸ばしてアイビールックや貴公子風の服できめ、スターの座へ駆け上がるザ・タイガースは成長の象徴として脚光を浴びた。

一方、アイドル的な路線でビッグになることなどを巡って、バンド内に葛藤を抱えており、オリジナルメンバーから脱退者が出た。71年に解散公演が行われたが、磯前教授は「成長が挫折し、ファンの心に悲しみが残った」という。

くしくも2年後の73年、第1次石油危機が起き、高度成長は挫折する。経済が発展し、幸せになれたかという反省も強まった。ザ・タイガースは当人たちの意図を超えて時代の光と影を体現していたといえる。

◇

「ザ・タイガース研究論」では、68年6月にテレビの生番組で起きた出来事を重要トピックとして取り上げた。

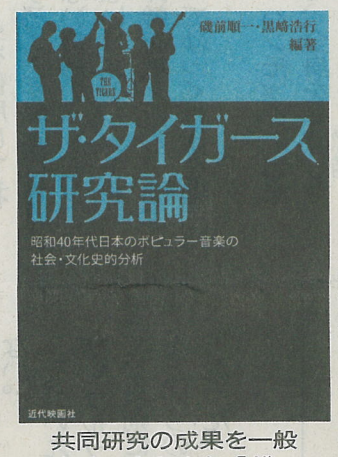
番組でメンバーは、年長者から音楽性や髪形などを激しくけなされた。ベースの岸部修三（現在は俳優・岸部一徳）が怒り、若者を理解しない者は本当の大人ではないと反論。「（自分たちは将来）奇麗な大人になりたい」と声を張り上げた。共同研究会のメンバーの一人、北浦寛之助教（映画学）は「『奇麗な大人』発言でめざすところを彼らなりに表現した作品がある」と、指摘する。放送の5か月後に出したアルバム「ヒューマン・ルネッサンス」がそれで、人間性の回復や愛を歌った一枚だった。68年といえば、愛と平和を訴えた米のフラワームーブメント、仏の社会変革運動「五月革命」、国内の安保闘争が進行し、世の中を変えようとする機運が高まっていた。北浦助教は「ザ・タイガースはその動向と共鳴していた」と話す。

バンド解散後、ソロになった沢田研二は近年、東日本大震災や原発事故をテーマに自主制作盤を作り、コンサートで歌ってきた。理想を抱き、社会に働きかけることを、今も続けている。

磯前教授は「奇麗な大人になるというのは、理想や人間性を見失わずに成熟することだと思う。それを私たちはやってきただろうか」と問う。

日本は現在、低成長や人口減のもと、新たな社会像を探る途上にある。うまく成熟を遂げることは、現在進行形のテーマであり、ザ・タイガースの再発見によって、そのヒントが見つかるかもしれない。

「徹底的に資料を集め、ザ・タイガースとは何だったかを考えた」と磯前教授（京都市の国際日本文化研究センターで）



共同研究の成果を一般向けにまとめた「ザ・タイガース研究論」

週刊明星1967年11月5日号の表紙を飾った「ザ・タイガース」。伊東ゆかりを囲み（前列左から時計回りで）加橋、森本、沢田、岸部、瞳

【ザ・タイガース】 メンバーはベースの岸部修三、ギター・ボーカルの加橋かつみ、ギターの森本太郎、ドラムスの瞳みのる、ボーカルの沢田研二。加橋脱退後、岸部の弟シローが参加した。代表曲は「シーサイド・バウンド」「花の首飾り」ほか。映画主演、野球場での大規模公演などで一世を風靡（ふうび）した。